武蔵野日曜集会

相愛

――ヨハネ伝第15章12～27節――

１９８４年12月16日（武蔵野）
小池辰雄

十字架の愛　捨て身の愛　キリスト我（われ）　そこに本ものがあるか　我なんじらを友と呼べり　ダメなやつを拾った　律法か福音か　憎まれるのが本当　十字架の極まりの愛　相愛

【ヨハネ15・12～27】

12わが誡命（いましめ）は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。13人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。14汝等もし我が命ずる事をおこなわば、我が友なり。15今よりのち我なんじらを僕といわず、僕は主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、我が父に聴きし凡てのことを汝らに知らせたればなり。16汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おおよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜わんために汝らを立てたり。17これらの事を命ずるは、汝らの互に相愛せん為なり。18世もし汝らを憎まば、汝等より先に我を憎みたることを知れ。19汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。汝らは世のものならず、我なんじらを世より選びたり。この故に世は汝らを憎む。20わが汝らに「僕はその主人より大ならず」と告げし言をおぼえよ。人もし我を責めしならば、汝等をも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも守らん。21すべて此等のことを我が名の故に汝らに為さん、それは我を遣し給いし者を知らぬに因る。22われ来りて語らざりしならば、彼ら罪なかりしならん。されど今はその罪いいのがるべき様なし。23我を憎むものは我が父をも憎むなり。24我もし誰もいまだ行わぬ事を彼らの中に行わざりしならば、彼ら罪なかりしならん。然れど今ははや我をも我が父をも見たり、また憎みたり。25これは彼らの律法に「ひとびと故なくして、我を憎めり」と録したる言の成就せん為なり。26父の許より我が遣さんとする助主（たすけぬし）、即ち父より出づる真理の御霊のきたらんとき、我につきて証（あかし）せん。27汝等もまた初（はじめ）より我とともに在りたれば証するなり。

●十字架の愛

この前は、

「私にいろ、私はお前たちの中にいる」

と言って、キリストがこの内在関係を非常に強く言われた。

「父（神）―我（キリスト）―汝（汝ら）」

という、縦の内在関係です。これは、具体的には、聖霊がなければこの関係に入れない。まぁ始めは、聖霊がなくてもいいですよ。けれども、本当の意味では、聖霊がないと入れない。「うち」なんて言ったってね、御霊がなければ。御霊が共通項なんだから。共通項はこの聖霊なんです。

12 **わが誡命（いましめ）は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛（あい）せよ。**

今度は、「汝ら、互いに」という横の関係だ。要するに、隣人です。あらゆる人が隣人です。けれども、まず特に信者仲間、召団の間。だから、「相愛」と今日書いた。「ラブ　ウィズ　アンアナザー」とか、「ラブ　ウィズ　イーチアザー」という。

ところで、その愛を、出だしにはっきり言ってしまっているんだ、キリストはね。

「わが誡命は是なり」

と言うんだから。「私のいいつけ」というか、「教え」。これは、

「わが汝らを愛せしごとく」

というんです。大前提は、

「私がお前たちを愛したように」

と。

「愛したように、愛しているように、また、これから愛するするように」

と。過去・現在・未来みんな同じです。キリストは「汝らを愛したるごとく」と言われるけれども、本当は、

「今にその愛の本当のことがわかるぞ」

というのが十字架なんです。けれども、キリストは地上にあって既に十字架の愛をもって愛している。十字架の愛をもって。いい加減な愛ではない。捨て身の愛、己を与える愛です。

●捨て身の愛

「捨て身」という言葉は形容詞で使ってはダメです。本当にその捨て身なんだ。愛することは奪うことではない。

「愛することは奪うこと」

と言った人がいるよ、有島武郎（たけお）の中にある。奪うのではなくて与えるんです。自分自身を与える。これが捨て身という。キリストがこの捨て身の愛をしたんだから。キリストが捨て身の愛をして、そして今度は、自分がキリストの中に捨て身しなければダメです。まず

それをしなければ、人に「捨て身」なんて言ったって、ダメなんです。

「我が汝らを愛したるごとく」

というのはキリストが十字架で、

「お前たちを捨て身で愛してきたんだ」

と。まだ本当はみんな受けとっていないけれどもね、こういうわけです。十字架にかかって捨て身の愛をしたのに、それもまだわからなかった。みんな羊たちは去ってしまった。弟子よりも、ある幾人かの女性の方がもっとキリストに捨て身でかかっていった。

「だけれども、今にお前たちは捨て身になるぞ。それは聖霊がきたら」

と。こういうわけです。

「己を捨てろ」

というのは、キリストの中に捨てるんですよ。それが「無私」の世界だ。私の無い世界だ。キリストの中に入ってしまっているんだから。「エン・クリスト」というのは「捨て身」のことなんです。キリストの中に入って、キリストの中に捨て身されていることを「エン・クリスト」と言う。「エン・クリスト」は時々、本当に冥想してくださいよ、独りで。独りで深く冥想しなければダメですよ。「ワッショイ、ワッショイ」ではダメなんだ。

キリストの中に自分が捨てられていると、自分はいないんだからね。そうすると、何があるかというと、この聖霊の愛がやってくるんだ。御霊の愛がやってくる。御霊の愛は捨て身の愛なんです。キリストは御霊の愛で愛してくださった。キリスト自身も、御霊の愛でなければ十字架にかかれなかった。要するに、神の愛ですよ。神の霊の愛です。

けれども、我々は神の霊の愛は直接にダメなんです、十字架の恩寵にあずからないかぎりは。捨て身の愛を本当に受けないかぎりは。十字架の捨て身の愛を本当に受けると、同時に聖霊が来てしまうんだから。「聖霊」なんて、何も不思議なものではない。本当に十字架の捨て身の愛を受けとれば、聖霊は来ますよ、俄然もの凄いその事態が。愛は最大の力を持っている。だから、その愛で、そういう愛で

「互いに相愛せよ」

と言う。

13 **人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。**

と言うけれども、己の生命はそのようにして捨て身の愛である。

「御霊の捨て身の愛だよ。楽しくできるよ」

と、今度は。なにも悲壮でも何でもない。楽しい。限りなく力がくるからね。捨て身の愛というのは限りなく力がくる。相手を支えてしまう、包んでしまう。これはみんな捨て身の愛です。

●キリスト我（われ）

自分なんかいないと思ったら、そこにもの凄い自分がいるんです。逆説的な言い方をすると。その自分はもはやいわゆる相対的な自分ではない。

「**我を見し者は父を見しなり**」

という。

「我を見し者はキリストを見しなり」

という、その「我」がいるんです、「キリスト我（われ）」というのがそこにいる。

それが、ある時は、それが本当に死になるかもしれない。その死は最大の愛です。

「**己の生命を棄つる**」

と言った、それが文字通りの意味のときは、これが一番すごい愛です。キリストの十字架がそれだったわけです。十字架を負って十字架の下にぶったおれる。それが死ですよ。これにでっくわした人は、その時はまだわからないかもしれないが、あとからその死が働く。私の兄貴は私に対してそういう死を死んだ。そういうことです。

「13 **人その友のために己の生命を棄つる、之より大（おおい）なる愛はなし**」

と。私は今日、私の号に特に「天愛」なんて書いたのは、これはキリストの天愛なんです。本当の恋愛でも、その愛する人のために己の生命を棄てるような恋愛でなければ本当の恋愛ではない。相手を奪うような気持だったら、そんなものはダメです。何愛であろうとも、対象が何であろうと、その愛が本ものなら、全部それは本ものです。私のは普通の神学者よりか違うんです。

「エロースだ、アガペーだ」

なんて分離しない。本当の愛なら、恋愛であろうと、夫婦愛であろうと、兄弟愛であろうと、師弟愛であろうと、友人愛であろうと、全部同じだ。これはもうはっきりしています。御霊の愛です。その愛にはみんな感激するんです、本当の意味で。

真理は一つなんです。分析されたところには本当の真理なんかない。分析されるところの区別される世界はまだ相対界です。絶対界にくれば、そんなことではない。相対界において絶対界を生きているような生き方にならないとね。だから、私の「無の神学」なんか解らないわけだ。

今度は私はもうはっきり、キリスト新聞の広告に書いてやった。「小池神学」と。

「小池神学の姉妹篇『無者キリスト』『無の神学』、特価五千円、1月から3月末まで」

と、そういう広告を出した。どれくらい応じてくるかは知らんけれども。そういう気合です。私は自分の頭で考えた神学を言っているのではないんだから。キリスト神学なんだから仕方がない。何と言われようとも一歩も退かん。

「**人その友のために己の生命を棄つる**」

という。「友」だって、「敵」だっていいよ、これは。何も「友」という言葉にこだわること

はない。「人その隣人のために」と。隣人が友であろうと、敵であろうと。キリストは敵のために、罪びとなる我々反逆者のために生命を棄てたんだから。

聖書はね、もの凄い次元で読まなければダメですよ、言葉にとらわれていたら。そうすると、

「あいつは勝手なことを言っている」

なんて。いいよ、勝手と言われようと、何と言われようと。こっちは原始力福音だからね、もの凄い力を持っている。爆発しそうな力を持っている。

そういう愛が燃えていなければ、生命していないんです。生きていないんです。

「互いに相愛せよ」

というのも、「相愛」というのも、

「向うがこれだけ愛したから、こっちもこうやろう」

なんて、そんな計算しているような相愛ではないですよ、この相愛という言葉は。お互いに捨て身の愛だぞということです。そうしたら、何が起きたって、相手が躓いても転んでも、大丈夫だよと言って担いでいくような、そういうのが本当の「フレンドシップ」というんだ。

「相手がおかしくなったから、俺はもういい加減でよしてしまおう」

なんてのではダメです。おかしくなればおかしくなるほど逆に愛の力が出てくる。

しかし、こちらがそれだけの気持でいるのに、それをまた拒むやつがいるんだよね、これ。もう妙な意地をはってね。あるいは、昔を思ってみたり。いろんなことでゴタゴタしている。いつまでたったって、その人自身が救われないだけのはなしだ。魂の世界はごまかしがきかんですからね、絶対に。だから、私はああいう讃美歌をつくったんだ。ここから逃げて行ったご連中がどうしているかなと、時々じっと祈っている。気の毒になるよね。昔の人に、友人に、

「まぁ、そんなことを言わないで、また来てみろ。小池先生は前進ばっかりしているんだ」

と。

●そこに本ものがあるか

いいですね。だから、このヨハネ伝15章12節というのは非常に楽しい、力強い言葉なんです。

「隣人のために生命を棄つる、そのような生き方をしなければ、本当の生命ではないぞ」

ということです。本当の愛でもなければ、生命でもないぞということです。生命を棄てたと思ったら、どっこい、永遠の生命を持っているんだ、その人は。この「生命」というのは「プシヘー」という字で、「ゾーエー」という字ではない。「ゾーエー」というのは永遠の生命に関する言葉で、「プシヘー」の方は相対的な肉体のこと。その人の「ゾーエー」は、永遠の生命は、棄てれば棄てるほど逆に力強くなる。非常に力強い、楽しい句です。あま

り悲壮に考えてはダメです、いわゆる悲壮に考えては。

「**人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし**」

と。最大の愛だと。これより大いなる愛がないんだから、これが最大の愛だと言う。キリストがその最大の愛を示したから、それと同質な愛を御霊において受けとってみろと。御霊は愛の生命ですから。

自分で実践すると、そういうことになる。頭で考えたりなんかしたらダメです。要するに、道徳の世界も実践しなければダメ。いわんや、宗教の世界は絶対に実践、身をもって証していなければ、告白はできない。告白というのは、証しないかぎりできない。「ついて」語っているうちはダメなんです。

私は、天野先生の伝記を書いたけれども、天野先生は本当に自分で実践しないことは言わないという、その姿勢でやっていたね。あれは本当に立派です。

「道徳は実践しないでやったら、それは空言であり偽善である」

と、そういうようなことまで彼は言っている。

とにかく、

「伝道、証するのに大胆なれ」

ということです。今はもう遠慮するときではない。福音に水を割ったらダメですよ。相手がどう思うと、言うときははっきり言いなさい。本当のことを言っていると、魂は響くんです。相手は

「何かこれは参ったなぁ」

と。いわゆる大法螺（ほら）ではないですよ。本当のことを言う。

14 **汝等もし我が命ずる事をおこなわば、我が友なり。**

「汝らは我が命ずる事を、もし、おこなわば」と、「もし」という言葉があるんだよね。仮定法になっている。まぁそれは仕方がない。キリストはまだ本当に行えるとは思っていないから。

「**もし行わば、友である**」

と。けれども、聖霊が来なければ行えないんだ。外側は、ある程度行ったようであるけれども、本当の意味で行っていない。

「**行わば、わが友なり**」

と。同じレベルにキリストは置いておられる。「友」はこれも複数です。キリストは、「信ずる」ということももちろん仰るけれども、「行う」という言葉の方がおそらく多いと思うね、キリストの言葉の中には。それで、カトリックは「行為」と言っているんだろうと思うんだが。悪くはないけれども。

「そうじゃない。信仰だ」

と、プロテスタントは言う。カトリックは「行」で、プロテスタントは「信」と、まぁ非

常に簡単にいえば、そうかもしれない。けれども要するに、この行が人間的な行だったらダメだし、この「信」も観念だったらダメなんだ。だから、本当の世界は、御霊では信行一如の世界になると言っているだけのはなしだ。プロテスタントが観念の信になったり、カトリックが律法の行になったりする。カトリックが全部そうだなんて言っているのではないですよ。今、大体のまちがった傾向のはなしを言っている。カトリックの神父さんには素晴らしい人がいます。むしろ、プロテスタントの牧師の方がダメだ。そういう場合が多いようだな。

だから、私は、カトリックだのプロテスタントだのとあまり言いたくない。カトリックでもプロテスタントでも教会でも無教会でも幕屋でも何でもいい。問題は、そこに本ものがなければダメだ。これは「宗教改革」という私の讃美歌にそう書いてあるでしょ。

「どれでも結構です、それぞれに役割があります。ただそこに本ものがあるかだけが問題です」

と。どうせ、人間は相対的なものだから。そんな相対的なものをどうのこうのとお互いに言い合ったって何になるか。問題は、そこに本ものがあるかということだけ。どうして、そういうことがわからないんだろうね。

●我なんじらを友と呼べり

15 **今よりのち我なんじらを僕（しもべ）といわず、僕は主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、我が父に聴きし凡てのことを汝らに知らせたればなり。**

キリストは簡単だね。

「みんな教えたから、だから、もう友と呼ぶ。みんな、わかったろう」

と。イエスというひとは面白いひとだ。非常に、ある意味においては、常識的なものの言い方をなさる。厳密な言い方をなさらない。厳密にいえば、まだダメなんです、これはみんな。本当は、受けとっていやしない。でも、

「もう受けとっている」

と、先を読んでしまっているような言い方です。

「だから、友と言っておくよ。だけれども、お前たち、もしそうでなかったら、本当の友になってくれよ」

と、まぁ言うわけだけよね、少し説明すれば。だから、聖霊の光でもって読まなければ、読めないわけです、本当の意味では。それを、聖霊の光で読まないで、ただそうであるかのごとく思ったり、また、そうであろうと一生懸命で努力したり、どっちもダメなんだ。くたびれてしまうだけだ。けれども、キリストが御霊にあっては本当に同じレベルにおりて来てくださって、友だと言い、あるときは、僕だと仰る。足まで洗おうとなさる。そして、

「僕は主人のことを知らない」

なんて、ここに書いてある。

「だから、お前たちは僕ではない」

と。

僕は主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、

もうこれは知っているから、だから、友だと言うんだと。知っていようが、知らないでいようが、とにかく主人の言うことは、「はい、はい」とやるのが本当の僕なんだ。「エホバの僕」という。では、キリストは、僕という概念はどこかへ捨ててしまったのかと。そうじゃないんですよ、こういう言葉は。そういう妙な平面論理の考え方をしないように。パウロは

「キリストの僕」

なんて自分を言っているでしょ。キリストの僕、いや、

「キリストの囚人だ」

とまで言っている。自分を僕とし囚人であるパウロは、友以上にキリストに本当に入ってしまっているひとだ。そうでしょ。ヨハネでも。使徒たちの次元はそういうわけです。徹底的にキリスト一点張りになると、そうなる。僕と言われようが、友と言われようが、どっちでも結構でございますというわけだ。非常に弾力性のある魂になってください。知識的に分析して総合しようなんて、そんな考えはダメですよ。学問の世界には、そういう操作もいります。けれども、福音の世界は、そんな操作はいらない。

●ダメなやつを拾った

16 **汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。**

これはヨハネ書簡にあるのと同じようなことです。まず先に愛した、選んだというわけです。選ばれたのは、こっちの資格ではない。ダメなやつだから、選んでくださった。キリストはダメなやつを拾ったわけです。我々はキリストに拾われたんだ。選ばれたなんて言われるよりも、拾われたと言った方がいい。落ち穂拾いみたいにね。本当に拾われたんですよ。そして、キリストの愛と義と力と――何でもいい――そういうものが段々身についてくると、なるほどこれは選ばれたということになってくる。そして、選ばれたものは責任を持つ。人に伝える責任を持つ。伝道の責任を持つ。証しの責任を持つ。責任も、頑張る必要はない。御霊の力で果たせる。こういうわけです。それが道徳の世界よりかもうひとつ上の世界です。だから、御霊ほどありがたいものはないんですよ。

誰かと昨日話していたら、

「先生は楽しくてしょうがないようですね」

と言うから、

「本当にそうだよ。楽しくてしょうがない。何も問題がない。何もこだわっていないから。いろんなことにでっくわせばでっくわすほど、逆に力が来たり、しょうがない人間です。絶対に行き詰まつませんよ」

と答えた。

「自分は始末の悪いやつだ」

と西郷南洲が言ったけれども、そういうわけなんです。始末の悪いやつ。

15 **今よりのち我なんじらを僕といわず、僕は主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、我が父に聴きし凡てのことを汝らに知らせたればなり。**

「凡てのことを汝らに知らせたればなり」と言ったって、本当に知ってはいないんだ、まだこっちは。けれども、キリストは先取りしたようなものの言い方をしていらっしゃる。

16 **汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。**

拾ってやったと。

而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おおよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜わんために汝らを立てたり。

しっかりと立ててやったと。

17 **これらの事を命ずるは、汝らの互に相愛せん為なり。**

互いに捨て身の愛で愛するためだと。

献金なんかも惜しみなくやりなさいよ。神さまに祝福されるから。奥田君が、

「京都では十一献金をやってます」

と言っていた。何も私は額のことを言っているわけではないけれども。気持のことを言っている。「十一」であろうと、「レプタ二枚」であろうと。いや、本当はみんな「レプタ二枚」の精神です。すべてが全的なんです。

互いに己を与えていく。与えると、神さまの「ゾーエー」が、永遠の生命が限りなくやってくる。これは本当に不思議なことです。「プシヘー」を捨てると、「ゾーエー」がやってくる。暫時的、相対的生命を捨てると、永遠的生命がやってくる。しかし、その相対的生命と言ったって、気合はみんな全的なんですよ。数量的に言っているのではない。質的に言っている。質的にはすべての為すことが全的でなくてはいかんということです。

サタンは、「エトバス」（サムシング）なんです。いつもいろいろ計っている。キリスト者は「アッレス」（オール）です。「アッレス」は自分が「ニッヒツ」（ナッシング）になると、「アッレス」になる。『ファウスト』の中にこの「エトバス」「ニッヒツ」「アッレス」が出てくる。これはおもしろいんだ。「サムシング」「ナッシング」「オール」。人間は大体この「エトバス」なんです。ガタガタガタガタしているのは、みんなこれは「エトバス」「サムシング」の世界です。相対的に計量している世界です。

「ナッシング・イズ・オール、オール・イズ・ナッシング」
という。神さまは「アッレス」で、キリストは「ニッヒツ」。我々もこの「ニッヒツ」です。
「私はキリストの無者」と言っているのはそのことです。無者修行をしているわけだ。
そのようにお互いに楽しい。もう、この愛でもって結ばれたら、何がきても絶対に切れません。お互いに本当の意味で助け合います。召団の兄弟姉妹というのはそういう気持でいかなくては本当じゃないよな。
「京都の特別集会へ行きたいけれども、どうしてもその旅費がない」
なんて。ああ、いくらでも都合するよ。遠慮なく言ってきてください。そういうことでもって行かなかったりすることは、お互いの本当の助け合いができてないことだ。「思いやり」というのは、「恕」ということはそういうことです。
「孔子の教えも結局は恕であるか」
という。思いやりであると。今は、思いやりの非常に足りなくなった世界です。それで、召団の我々は楽しくいかないとね。苦虫をかんだような顔してたらダメだよな。

●律法か福音か

18 世もし汝らを憎まば、
今度は、「憎む」という言葉がさんざん出てくる。
汝等より先に我を憎みたることを知れ。19 汝等もし世のものならば、
この「世のもの」とは、「世よりのもの」という言い方です。世から出てきたものならば、
世は己がものを愛するならん。汝らは世のものならず、我なんじらを世より選びたり。
相対的な世の中の人間だったら、その通り。誰でもそうだ。そこから引っ張り出された。そして、神族になった。神さまの族にされた。天国人にされた。それだから今度は、世は憎むという。憎んだり妬んだりする。争いも持ってくる。
だけども、なぜ憎むかというと、まず、キリストが憎まれた。なぜ、キリストは憎まれたかというと、ユダヤ人の金科玉条にしている律法を破ったから。それを乗り越えたからなんです。キリストが憎まれているのは、このユダヤの宗教に対して――アンチ・ユダイズムです――ユダヤ教に反対したからなんだ。いや、律法はそんなものじゃないということをキリストは言われた。モーセの律法よりももっと凄い世界をキリストが開示したら、憎まれた。山上の垂訓がそうなんです。そういう律法を乗り越えた世界を与え開示したら、みんなに憎まれた。しまいには十字架なんだ。
「その私に一緒になれば、どうしたって、お前たちは世から憎まれる」
と。こういうわけです。
だから、この憎しみの内容は、律法か福音かということです。ところが、福音の世界が

一番楽しい世界なのに、これをみんな取りそこなうわけです。なかなか、日本人がキリスト教に入ってこないのもそうなんだよな。もう先入観でもって敬遠している。敬遠でも嫌遠でも何でもいいけれども。

だって、そうじゃないですか。私は無教会にいたさ。ところが、聖霊が入ったら、今度は憎まれてしまった。そしてアウトサイダーにされた。

「世ばっかりではない。同じキリスト者が憎むよ」

と言う。観念クリスチャンが、「パリサイ人（びと）」が憎む。そうなんです。憎まれているのは、こっちが本当の真理を持っているからです。こういう本当の真理を持つと、憎まれる。また、日本人はケチなやつが多いんだよな。本当のことを言うと、今度はそいつを白眼視したり、あるいは黙過したり、なかなか本当に認めようとしない。人の足を引っ張るようなことばっかりやっている。みんな色眼鏡を使っている。透明な目で見れば、真理はちゃんと見えてくるのに。太陽の光ではなくて、蛍光灯やいろんなもので見ているから。ローソクで見たり。御霊の光で見れば、真理は真理で、誰が言おうと真理は真理なんだ。どんな悪いやつが言おうと、そこに真理があれば真理だと見る。

天野先生が、

「無理が通れば道理引っ込む」

という妙な諺が大嫌いだと言う。

「無理は通らない。道理は引っ込まない」

と書いてある。その通りです。道理は踏みにじられることはあるよ。けれども、決してそれで引っ込まない。天野先生はそれをはっきりと言って、それで容れられないと、さっさっとその地位を捨ててしまう。なかなか劇的な立派な生涯でした。大学の学長だって、彼は辞めてしまった。学生運動で若い先生方が学生と一緒になってけしからんことを言ったりするやつがいた。

「そんなことだったら、私はもう学長をやる気はないから」

と言って、先生は辞めてしまったんだ。本当ですよ。天野先生が辞められてしまったら、大学はどうなるかと。仕方なしに、今度は、天野先生を学長でなくて、学園の園長さんにあとからしたんですけれども。情けない話ですよ。

●憎まれるのが本当

とにかく、福音の真理のためには、皆さん、捨て身でかかっていけば、キリストの中に捨て身すれば、もの凄い力がきますから、心配いりませんよ。

ここに「憎む」という言葉がさんざん出てくる。憎まれるのが本当なんです。

「ああ、憎まれたから、これで私は本ものになった」

と、こういうように思ったらいい。本ものの証拠だと。こっちは憎みませんよ。私は、そ

うだね、「あのヤロー」というような気持を持ったことはあったかもしれないが、「憎らしい」というような言葉を私はほとんど使ったことがないね。それよりも、気の毒になってしまう。

「バカヤロー！」

くらいなことは思ったけれどもね。「慈しみ」「憎しみ」という言葉があるね。「憎しみ」はいらん。憎しみを持つと、自分がおかしくなる。

「まぁ、お気の毒なはなしです」

と、こういうわけだ、すべて真理から遠ざかって憎むようなやつは。かわいそうくらいなものだ。かわいらしくはないよ、かわいそうなんだ。

だから、

「お前たちが憎まれても、お前たちより先に神さまや私を憎んだ」

というようなことがそこに書いてあるね。

18 世もし汝らを憎まば、汝等より先に我を憎みたることを知れ。

そうでしょ。

「それよりか先に私がユダヤの律法に反して、そして、大祭司やパリサイ人が何とかかんとか言うようなことをはっきりこっちが言うものだから、憎まれたんだよ」

と。群衆はキリストを憎みませんよ。始めはついていた。ところが終いには、憎むやつらの味方になって、十字架にかけることになってしまった。

「バラバを赦して、キリストを十字架にかけろ！」

なんて。

19 汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。汝らは世のものならず、我なんじらを世より選びたり。この故に世は汝らを憎む。

世から拾い出したから、私と同じになってしまったから、お前たちは当然憎まれるよと。

20 わが汝らに「僕はその主人より大ならず」と告げし言をおぼえよ。人もし我を責めしならば、汝等をも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも守らん。21 すべて此等のことを我が名の故に汝らに為さん、それは我を遣し給いし者を知らぬに因る。22 われ来りて語らざりしならば、彼ら罪なかりしならん。

「私が天界からやって来て、福音を語らなかったら、別に罪はないだろうけれども、語ったら、彼らは逆らったから、それで彼らは罪ができてしまった」

と。これは聖霊に逆らう罪だ。恐いよ、そういう罪は。

23 我を憎むものは我が父をも憎むなり。

「父・我・汝ら」がみんな同じように憎まれる。

24 我もし誰もいまだ行わぬ事を彼らの中に行わざりしならば、彼ら罪なかり

しならん。然れど今ははや我をも我が父をも見たり、また憎みたり。

非常にコントラストがはっきりしている。ただ、キリストの愛の行為、言葉によって癒されたり、救われたりした人たちは何も憎みやしませんよ。けれども、聖霊を受けるまでは、本当の味方にはなれなかった。十字架はキリストただ独りで担わなければならなかった。

25これは彼らの律法に「ひとびと故なくして、我を憎めり」と録したる言の成就せん為なり。

旧約にそう書いてあると。これは詩篇35篇です、あるいは69篇。これは

「故なくして、我を憎めり」

ではないですよ、「故」はおおいにあるんです、キリストの場合は。この「故なくして」というのは、本当のことわりはこっちにあるのに、そのことわりが分からないから、彼らは「故なくして」という言い方になる。「ことわり」というのは道理のことですよ――天野先生の言葉を使えば「道理の感覚」を持たないから――けれども、福音の道理は、生まれつきの我々にはちょっと受けとれない。これはパウロが言っているとおりです。

●十字架の極まりの愛

26父の許より我が遣さんとする助主、即ち父より出づる真理の御霊のきたらんとき、我につきて証せん。

その通りです。「父よりきたりし」というのは、父より来て私を通って――キリストを通らないとダメですよ、この聖霊は――「十字架を通って」ということです。聖霊は愛の霊だから、十字架の極まりの愛、極致の霊です。そのように、私たちは極まりの愛をもってキリストに愛されているから、キリストを愛せざるをえないでしょ。それを信仰というんです。何でもないんです、信仰なんていうものは。何か信仰とはむずかしいことだと思っているが。キリストの愛を受けたから、愛せざるを得ない。

みんな人は愛されることを望んでいるんですよ。動物でもそうだ。やさしい言葉をかければ、犬なんか尾をふってすぐやってくる。犬の名前を呼ぶときに、こっちが強い呼び方をすると、ちゃんと犬は感ずるんだな。やって来やしない。もう言葉の語気でもって彼らは分かるんだよ。怒られると思って、やってこやしない。こないだ草履を噛んだから、すこし怒鳴るように言うと、もうちゃんと分かっているんだ。やってこない（笑）。動物であろうと、人間であろうと、みんなこれは愛されたいんです。誰でもが本当は愛に飢えているんです。

最大の愛をキリストに示されて、なぜ、キリストの愛に来ないかというわけだよな。これは愛せざるを得ない。ゲーゲン・リーベ（応える愛）です。愛に対する応えは、愛をもって応える。それが信という。「信ずる」というのは何もむずかしくはない。「信ずる」というのは何かむずかしいことかと思うと、とんでもない。「信ずる」は「愛する」ということです。

「シンアイなる」という言葉があるじゃないですか。いい言葉だよ。「親愛」でなくて、私は「信愛」と書く。熟語なんてものは、真理に沿って書けばいい。何も昔からの書き方ばっかりを踏襲する必要はひとつもありはしない。その「信」の字は間違っているなんて、何を言っているかと。文語はみんな自分で熟語も造るでしょ。言葉というのは常に流動していくんだからね、決まったものではない。文法なんてものは、ただこういうような例があるから、それで文法というのが出てくるけれども、文法があって言葉があるのではない。言葉は生きているのだから。いつも、言葉というのは文法を乗り越えている。活ける言葉自身が文法なんです。

●相愛

26 **父の許より我が遣さんとする助主（たすけぬし）、即ち父より出づる真理の御霊のきたらんとき、我につきて証（あかし）せん。**

「我が遣さんとする助主」と書いてあるね。キリストを通して遣わされるところの、その御霊が、助け主が、「パラクレートス」が、即ち父より出づる真理の御霊――「我は真理なり」というこの真理の御霊だ、キリストの御霊だ――のきたらんとき、我につきて証せんと。「我につきて」なんて言わなくたっていい。「我を証せん」で結構なんだ。「について」という言い方はとかくすると間接になる。直接でもって、「我を証する」ということ。

27 **汝等もまた初より我とともに在りたれば証するなり。**

「始めから一緒にいたから証する」と仰っているけれども、この証ができないんです、キリストが十字架にかかるまでは。キリストは、未来完了で未来の現在のことを言っているんだ。これはペテロがそのとおりじゃないですか、最後まで躓いているじゃないですか。ところが、聖霊が来てから、ペテロは本当に「我について証する」人になったでしょ。キリストは先を見越して、簡単に仰っているけれどもね。

御霊の光で見ると、聖書なんて何もむずかしくないですよ。まぁ、いろんなことを知るために、一流の註解書はお読みになって結構です。けれども、本当に聖書を読むのは、実践をもって御霊で読むことです。実践に裏付けられなければダメです。

そのように、愛するということは、時々引用するけれども、マルチン・ルターが『クリスチャンの自由』の最後の30節で言っている言葉がある。

「これまで述べてきたことから次の結論が生ずる。キリスト者は自分自身に生きないで、キリストと隣人に生きるということだ。信仰によってキリストに生き、エン・クリストです。

愛によって隣人に生きるということだ。信仰によってキリスト者は自らを超えて神の中に入る。神から愛によって再び自らの下にくだる。それでも神において生き、神の愛においていきるキリストが言われる通りだ（ヨハネ伝1章15節）。「天開けて人の子の

上に神の使いたちの昇り降りするのを汝ら見るべし」、見よそれが真の霊的なキリスト者の自由であって、すべての罪や律法より心を自由に、天が地を超えているようにすべての自由に勝る自由であること。この自由を正しく解し、また保つことを可能にしたまわんことを。アーメン。」（佐藤繁彦訳）

そういう文章です。素晴らしい言葉ですね。だから、天使が昇り降りするように、この愛が神さまと自分との間に、そしてまた隣人に行く。これはキリストが言っている通りです。

「愛とは、精神を尽くし力を尽くし全身で神を愛する。そのごとくまた隣人を愛する。この二つのことは一つだ」

と言う。要するに、それをルターがこういうように語った。それが本当の「自由」である。自由は愛に生きることが自由なんです。勝手気儘な自由とはおよそ違う。自由が、要するに取り違いして、いろんなことになるわけです。人格者は自由である。この自由という言葉がいかに誤られるか。今の民主主義は勝手気儘な自由で困ったものだ。それは身勝手主義という。

そういう愛で互いに相愛（あい）してください。これが相愛という。天愛における「相愛」ということ。それは御霊は愛の霊だからね。御霊を受けているひとは尽くることをしらないというわけです。そして、力を持っている。必ず力があります。力がなかったら、くたびれます。では、今日はそこまで。